漂流

輝創

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
漂流

【Ｎコード】
Ｎ１１３３Ｚ

【作者名】
輝創

【あらすじ】
俺は朝原弘幸。どこにでもいるろくでもない高校生だ。がきんちょクラスメイトの日笠まひるが夏休みに南の島に旅行に行かないか誘ってきた。俺はそれを承諾して・・・？

俺

俺の大事なものってなんだろうな。

毎日そればかり思考しているが結論はいまだに出ていない。

昨日、有名洋菓子店で買ったモンブラン？　いいや、俺はチョコレートケーキ派だ。

おとといに父親からもらった小遣い？　それが大事なら最初からモンブランなど買っていない。

俺はモンブランのひとかけらを口に頬張りながら考える。

・・・・・・おっ、このモンブラン、結構いけるんじゃね？　前言撤回。俺やっぱ、モンブラン一筋だわ。

どうやら俺の大事なものはコロコロ変わるらしい。良くいえば「柔軟」、悪く言えば「浮気性」。

だからその答えが出るはずもなく、俺は今日もダラダラ過ごす・・・はずだった。

まひる

女の子と二人きりなんてシチュエーションに憧れている男子共よ。

そんなもん、幻想以外のなにものでもない！

どうせお前らのことだから、屋上に彼女を呼び出して、
二人で手を握り合いつついい雰囲気に持ち込んで
最終的にはお互いの欲望をぶつけまくるなんてシーンを思い浮かべてるんだろ。
甘い！甘いわ！お前らのムッツリぶりにはあきれて声も出ない！
否定はしないよ。実際その幻想のような場面に出くわすリア充もたくさんいるからな。
そいつらは今すぐ爆発するべきだ。ダイナマイト１００個使っても物足りない。
問題はそういった展開になることがない我々の思考なのだ！
女に期待するな！女は魔物だ！女は悪魔だ！

・・・・・・だからこそ。

「ひろゆき～」
「・・・・・・なんだよ」
「ふふっ、呼んでみただけ」

俺の隣にいる女がすっげぇうっとおしいわけで。

え、なにこの女。なんで深い意味も無いのに俺の名前を呼んだの？
　馬鹿なの？
実際ドラマでカップルが互いの名前を交互に発しながらのエンドレ

ス展開があるが、
アレは二人で意思疎通ができているからこそなせる業なのだ。
いや、別にコイツ・・・・・・日笠まひるのことは嫌いじゃないよ。
頭にかぶっているベレー帽は似合ってると思うし、まひるの天真爛漫な性格も俺的には好感触だ。
肩までかかったくらいのこげ茶色の髪、くりくりとした瞳、・・・・・・そして矮小な胸板と身長。
むぅ・・・・・・もうちょっと成長すれば幅広い支持を受けるだろうが、
これでは特定の層にしか受けないんじゃないだろうか。まあ、俺もその中に含まれるけど。
ここまで語った部分だけ見れば、彼女に特に問題はないように思えるが、一つだけ許容できないことがある。
それはコイツの常識と知能レベルが小学生高学年と同程度なので、いろいろと俺の周りで面倒を起こすのだ。
こないだなんか、俺が図書室で読書をしているといきなりコイツがやってきてて、
「弘幸弁当なくしたー」と泣きわめき、周りで本を読んでいた人から白い目で見られてしまった。・・・・・・俺何もしてないってのに。
結局その時は俺が弁当を支払うハメになってしまった。無論お金は返してもらってない。
だから正直まひるとはあんまり関わりたくない。
いくら可愛くても、中身がそれに伴わなければイチャイチャする気も失せるのだ。
しかし、「今日の昼休みに屋上に来て」と呼び出された以上、ほったらかしにするわけにはいかない。
という訳で現在屋上で彼女と二人きりな訳なのだ。
彼女が満面の笑みをしている中、俺はふと思っていた疑問を口にする。

「お前クラス委員の仕事しなくて大丈夫なのか？配布物があるからって先生に呼ばれてただろうが」
「大丈夫だよ、あの口うるさい委員長様が勝手にやってくれるから」
「そうですか・・・・・・」
なんて責任感の無いやつだろう。間違ってもこいつに世界の命運がかかる大事な場面を託してはいけないな。
いやあの委員長も相当アレなヤツだから関わりたくない気持ちはわからない訳でもないが。
「そんなどーでもいいことなんていいんだよ！私は弘幸に用事があるんだから」
「いったいどうしたってんだよ。宿題なら見せてやらないぞ」
「宿題？そんなものあったっけ？」
まひるはぽかんとしている。
「今日数学のプリントやってこいって教師に言われてただろうが」
「ええっ！？　まだプリントやってないよ！どうしよう・・・」
慌てふためくまひる。・・・・・はぁ、こいつは。
「仕方ねえな。プリント見せるの今回だけだからな」
「本当！？　弘幸殿、この恩義は一生忘れませぬ！」
その恩義を忘れる気ないなら、俺の身の回りで面倒事起こさないでくれよ・・・・・・。
でもどうやらまひるの用事は宿題の件とは違うらしい。俺は再度彼女に尋ねてみる。
「そういえばお前の用件ってなんだ」
「ええとね、もうすぐ夏休みでしょ。だからさ、休みを利用して南の島へ遊びに行かない？」
南の島か・・・・・・。そういやコイツの両親は大富豪で、いろんなところに土地を所有しているって話聞いたことあるなぁ。
「誰と行くんだよ。まさかお前二人と？」
「えっ！？　・・・・・・そ、そのっ、ともだちといっしょに」
「どうした？お前、目がキョロキョロしてるぞ」

「な、なんでもないよ！　挙動不審なだけだよ！」
「ああ、納得」
「納得するんだ！」
なぜかまひるは不服そうな様子だが相手にしないでおく。
俺は旅行の件について思考を巡らす。確かにまひると二人なら不安なことこの上ないが、友達がいるなら安心かな？
それにこれは「アイツ」にとっていい機会かもしれないな。
「なぁ、俺も連れてきたいやついるんだけど連れてきていいのかな」
「え・・・・・・別に、いいけど」
「決まりだな、明日その友達にも召集かけといてくれよ」
「うん」
そういって俺達は解散することになった。
しかしなんでまひるのヤツ、なんで最後のほう悲しそうな顔をしたのだろう。
そんなことを考えながら、俺は「アイツ」の家に赴くことにした。

真夜

「例えば『ヒロ』の目の前にロングの黒髪を纏い、鋭い目つきをしたクールビューティーがいたとする。
ここでは仮に『影山真夜』としておくわ。私と名前が同じなのは偶然よ、気にしないで。
もし、その子が『ヒロ』のことを変態的に愛しているとする。毎日『ヒロ』のことを想像しながら、
『真夜』が発情しているの。もっと『ヒロ』分が足りない、激しく『ヒロ』を貪りたい。
そして、いつしかその想いは『真夜』の胸の中にこびりついて離れなくなってしまった。
ああ、何て悲劇。この恋心は伝わることなくこのまま増殖されてしまうっていうの？
ねえ『ヒロ』。『真夜』はどうしたらいいの？」
「うん、黙れ引きこもり」
正直初見でここまでキャラ把握出来るヤツも珍しい。もちろん褒め言葉でもなんでもないが。
真夜は俺の幼馴染で本人の説明通り容姿端麗。その上あまりにも頭脳明晰なので、
全教科テスト満点を条件に高校欠席許可を貰ってる凄いヤツ。
別に体調が悪いから学校を休んでいるという類のものではない。

一言でいえば「狂っている」のだ。

小学校の頃、とある事件がきっかけで極度の人間不信に陥ってしまった。どこにも外出することなく引きこもってしまった。
あれは、俺のせいだ。俺がもうちょっと彼女のことを気にかけていてやればこんなことにならなかった。

だから俺は罪滅ぼしのために彼女に対しては人一倍暖かく接してやった。血をにじむような努力をした。
おかげで俺に対しては心を開いてくれた。・・・・・ただし異常なほどに。
どうやら精神科医の話によると俺以外の人間には未だに嫌悪感を向けていて、そのストレスの反動で俺に執着するようになったらしい。
そんなわけで俺と真夜は俺が学校に登校しているとき以外はほとんど一緒にいる。
こちらの高校に登校する際も、真夜がしつこくついてきた為、この二階建てのボロアパートの部屋に住んでいる。
だがさすがに寝る時まで一緒なのはどうかと思うので部屋はそれぞれ別室を借りた。ちなみに真夜の右隣が俺の部屋だ。
今は真夜に話したいことがあるから彼女の部屋にお邪魔している。
真夜は無表情のまま頬を紅潮させて、俺に迫ってくる。
「ヒロがいなくて寂しかった」
「そうか。まずは俺に近づくことからやめようか。おい、なんで上着脱いでんだ！」
「もう何年間もスキンシップしてるでしょ？あんなやらしいことやこんな淫らなことも・・・・・・」
「やってねえよ！全てお前の妄想だよ！」
「私のこと嫌い？私はただの使い捨てだったとでもいうの？」
「ちっげぇよ！嫌いじゃないから俺から離れろよ！そしてシャツ着ろよ！」
「ふふっ、ヒロ大好き」
・・・・・言っておくが、これが毎日である。年中無休だ。
もしもネットでこんな場面が流れたらお前らはリア充爆発しろというだろうな。
こんな場面を女子にみられたら、真夜に殺意沸くやつも多いことだろう。
いい加減こいつに「自立」という言葉を教えなければ、死ぬまで一

緒にいそうな気がする。
だが、別にコイツのことが嫌いなわけではない。「恋人」というよりは「親友」って感情の方が強いのだ。
実際俺も困った時には真夜の頭脳を借りて、一人じゃ解決できないような問題を解決してもらってる。
そんなこともあって、俺は真夜のことを一番信頼している。でも恋愛感情が沸くかというとそれは別問題。
だってその感情は彼女の人間不信の念によって生まれた仮初めのものなのだから。
だから俺は彼女に独り立ちして欲しいと思い、まひるの旅行の話を持ちかけようと思ったのだ。
この旅行でまひる達と友達になって、真夜の人間不信が少しでも解消されたらいいというのが俺の望みだ。
まひるはああ見えて友達は多い。アレだけ騒動起こしてばっかりだと皆に嫌われそうだが、
あの屈託の無い笑顔で誰とでも仲良くなってしまう。それがアイツの才能だな。
だから真夜を連れて一緒に旅行に行こうと思ったのだ。
このままでいいはずがない。彼女の将来のために動こうと決意したのだ。
だから俺が彼女に出会って一度も行うことの無かった禁忌に挑む。
「真夜！」
「ん」

「俺、旅行いくんだけどさ、一緒に旅行、行か・・・・・・ない？」

・・・・・・。
沈黙。ただ沈黙のみがその場を支配する。
そしてしばらく経って、彼女は全く表情を変えるようすもなく、静かに口を開く。

「ごめん・・・・・・私まだ怖い」
彼女の出した答えはＮＯだった。ま、やっぱまだ心の準備が必要だよな。
「そうか。じゃあ俺だけが旅行に行くのもアレだな・・・・・断るか」
しかし、次に彼女の口から出てきた言葉は意外なものだった。

「ヒロだけで・・・・・・行ってきてもいいよ？」

「え・・・・・・」
・・・・・・俺は驚いた。今までの彼女からは信じられない言葉だった。
「聞こえなかった？ヒロだけで行ってきていいんだよ」
「でも、お前は・・・・・・」
「大丈夫。ヒロがいないのは寂しいけど、私がヒロの人生縛っちゃダメだと思う」
真夜はそういうと、俺に向かってやさしく微笑みかけた。
・・・・・・なんだ。真夜もちゃんとわかってるじゃんかよ。
コイツは俺の知らないところで、ちゃんと「成長」していたようだ。
ならば俺は彼女の選択に答えて上げなけらばならない。
「ったく、そこまでいうなら行ってきますか」
「お土産かってきてね」
「ああ。友達と仲良くやってくるよ」

「・・・・・・友達？」

「ああ友達と・・・・・・。っておい、どうした？」
真夜がなぜか怒気を纏い、ぶるぶると震えている。な、なにか怒らせるようなことといったっけ？
そして真夜が一言。

「私も行く！」

「は！？　お前外出るの怖いんじゃなかったのかよ！？」

「怖いけど・・・・・・怖いけど・・・・・・」

「？」

「私はヒロを取られるのは一番嫌なの！」

彼女の声がアパート中にこだまする。

・・・・・いや俺の望んでいた展開だけどさ、これって「自立」と違くない？

むしろ「依存」の方が悪化してないか？

まあ当初の目的は達成したが、こりゃあカオスな旅行の予感がするな・・・・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1133z/

漂流

2011年12月5日19時53分発行